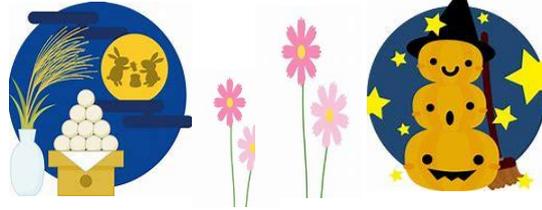


トピックス

1. 「社労士への道」第2回 失業前
2. 龍馬脱藩後の足跡 (2)



福留経営労務管理事務所
姫路龍馬会
社会保険労務士・行政書士
福留章

龍馬通信

No. 34

2020年10月号

心、深き人 寒露～霜降の候

コロナ禍が収束しないまま、季節は秋の気配。草木に降りる露もいつの間にか冷たさを感じるように。お盆から後の猛暑。身をやく程の夏将軍も流石に矛を納めて退散というところ。

スーパーの果物売場には夏から秋への衣替え。スイカ、桃、いちじくなどは影をひそめ、ぶどうは頑張っているけれど梨や柿や栗など秋の多彩な色どりが売場を占める。日本人の1番好む季節は秋だという。性格にもよるが「秋を愛する人は心深き人」でしたっけ？

灼熱の夏を過ぎ人は少し心に火傷のようなものを負って疲れを感じ、涼しい秋の到来を待つ。今年はすべてがコロナ禍に振り回され、非日常が日常となり、そして人はその非日常に慣れてきた。秋でなくても少し身を引いて、物事の真の姿を思慮することで私達は生きのびようとしている。もうひと頑張り。やがて明るく楽しく実のある日常が戻ってくるはず。それまで身をおさえて耐えていきましょう。「うつらない」「うつさない」これが総てです。

※寒露 10月8日頃 霜降 10月24日頃



龍馬と私 龍馬脱藩後の足跡 (2) 勝海舟

松平春獄の添状(紹介状)を手に、龍馬と千葉重太郎が当時幕閣であったが開名派として認知されていた勝海舟を、赤坂氷川崖下の邸を訪ねたのは1862年(文久2年)10月の事。海舟40歳、龍馬28歳の事である。

一説によれば(春獄の後日の手紙)春獄との面談の際、名差しで勝海舟と横井小楠について「兩人異論をなし、妨害ありとの世論を信じ勝に面会し議論を起こして勝を軒殺するの目的也」と春獄に告げたとされる。そんな龍馬に勝海舟への添状を書くというのはどうも。何かの聞き間違いであったと思われるが、多くの小説や書物には当初の目論見として「斬殺」の意図があったと書かれているケースが多い。しかし常識的に考えればもしそういう意図があるなら、わざわざ勝の屋敷を訪ねる必要もないし、当時の龍馬に勝暗殺の確固たる意思があっ

たとは想像できない。後世の人が劇的な出合いをよりドラマチックなものにする為にアレンジをしたとしか考えられない。ともあれ海舟はそんな意図を知ってか知らずか客室に招き入れ、かなり情熱的に世界と日本の情勢を教授している。地球儀を見せて、どこが日本かわかるかと問うと、これがこの小さな島が日本ですか？と龍馬が絶句したとも伝えられている。当時勝は幕府から軍艦操練場頭取に任命され翌月の8月には軍艦奉行に格上げされている。れっきとした旗本であり、幕閣である。余程、開明的で肝のすわった人であったと思われる。来る者こばまずで有名だったようだが、逆に言えば幕末期、幕府の権威も凋落の一途でありどうにもならない時代の波に翻弄されていたとも思われる。面談し勝の人的魅力に



圧倒された2人はその場で勝門下に入る。なんとも劇的だが少々謎めいていたりする。とはいえ、その後の龍馬の活躍の糸口を開くことになった事は間違いない。龍馬は多くの仲間を勝門下に入れている。甥の高松太郎、先に脱藩していた吉村寅太郎、ともに脱藩した沢村惣之丞、龍馬の目を世界に広げさせた河田小龍の紹介で近藤長次郎、新宮馬之助、千屋寅之助、望月亀弥太、安岡金馬ら、後の亀山社中、海援隊の基礎となる男達である。又、海舟の護衛役として、後に「人斬り以蔵」の異名をとることになる岡田以蔵も入れている。海軍奉行並にあった海舟にとっても、神戸に海軍操練所を開くにあたり人手が必要であり龍馬を弟子にした事で大きな力を得る事にもなった。龍馬は単なる尊皇攘夷ではなく更に高い、深い自分のあり様を求め続けていた。殺意というよりは素直に開明的な春獄や海舟の話が聴きたかったというのが真実であろう。訪問時の事は海舟は後に著した「氷川清話」の中でこの間の消足を伝えている。「坂本龍馬、彼はおれを殺しに来た奴だが、なかなかの人物さ。その時おれは笑って受けたが、おちついて何となし昌し難い威厳があつてよい男だったよ」(意訳)

龍馬はこれ以上ない師を得て、脱藩浪士達とともに新しい維新への道を切り開くことになる。龍馬と海舟。歴史の歯車は時として奇跡を生む。まさにこの邂逅(大事な人に会ふこと)は歴史的な奇跡と言えるかも知れない。



播州日誌

「バカの国」

百田尚樹(写真)著 「バカの国」を読んだ。5年位前からの新聞・TV・週刊誌の記事から、とんでもない本当にバカバカしい話を集めている。一言で言うと読後感のさっぱりしない本であった。なる程とうなづく所もそうでない所もあったが確かに世の中、バカが多すぎると私も思う。とんでもない話にはヘドが出そうになるし、バカバカしくて、本を投げ出すことも何度か。中でも生活保護の不適切な給付の問題がある。不正が多すぎて、このままでは制度的に破綻するし、そうなれば本当に保護の必要な人が孤立してしまう。政治活動費の有様も余りにもずさんで頭が痛くなってくる。泣きたいのはこちらの方だ。公務員の杓子定規、お役所仕事は、有史以来のものだがいよいよバカが増殖して質量ともに極限にきている。警察官の飲酒運転、窃盗、ワイセツ行為、とくるとあいた口が閉まらない。子供達にいじめをしないようにと教育指導すべき立場の先生による同僚へのいじめ……。いじめに使われたカレーにちなんでその学校では給食のメニューからカレーが外された。あゝ「このバカヤロー」



2020.8.10

「酒飲みの戯言(ざれごと)」

コロナ禍のせいで、街に飲みに出なくなっていて久しい。それはそれ、慣れてしまえば家飲みも又苦しからず。思いつくまま日誌のように書き綴った文章を読み返して平成24年1月23日付けの「酒酔い」というのが目についた。24年というとは8年前、まだ60歳半ばというところで元氣一杯だった頃。酒飲みの言い訳のような戯言のような。とにかく懐かしさのあまり今回掲載することにした。

酒は気心の知れた者と飲むのが一番いい。酒は益々その結びつきを強いものにしてくれる。飲む程に酔う程に肝胆相照らし、両膝を打つ。「丁々発止」の激論も山海の珍味の如く酒肴になる。酒はよいものだ。気分を和らげ舌を滑らかにしてくれる。酒は飲むべし、友は選ぶべし。至福の時間は風のように過ぎていく。別れ際の握手には、男にしか解からぬ男の夢(ロマン)がある。余韻は心地よく明日への活力となる。酒は人生を2倍にしてくれる。春夏秋冬、四季折々の風情の中で時に応じて



人々の心を慈雨の如く湿らせてくれる。腹立しく閉塞感に覆われた現代社会。酒は一服の清涼剤として心に沁み
てくる。今、この酒をこよなく愛し痛飲する。夢を追いながら。

2012.10.23

「社労士への道」

第2回 失業前

何故志望が「社労士」であったかという、退職の5~6年前、私はK社の子会社H社（姫路市）の社長代行であった。病気がちだった社長との雑談の中で「労務士」と言う仕事があって、仲々面白い仕事だと思うよと言った話が妙に頭に残っていたからだ。当時のH社は20人位の人たちを使用して、本社の下請け的な状況だった。記憶がやや曖昧だが、処理t数一日9t程であったものを2年ぐらいで20t近くまで生産量をあげた事を覚えている。近くに白国の自衛隊の幹部用の官舎があった。出張が多い夫の留守に、少しでも稼ぎたいという奥様連中に声を掛けて10名程を増員し、それで生産量が倍増したのだった。社長代行といっても実際は一兵卒であり、人件不足の折から、毎日のように、場合によっては一日中現場に入ることがあった。就任した当時は、本社に対して「取締役なんかいらん、現場に入る人間を入れてくれ」という声があがった程の人手不足。何とか納得してもらったが、必要に応じて現場に入るというのが条件だった。

リネンサプライ業。病院やホテルに貸し出す敷布、包布、枕カバー、タオル類を洗濯し、製品化して再納品する。連続洗濯機と五連のロールアイロンによる大量生産、大量消費。薄利多売の典型的な業種。熱源として蒸気を使っているのも夏は40℃以上の暑熱な職場となる。当時私は40代前半。年上のおばちゃん達の下ネタに翻弄されながら、とにかく精一杯仕事をした。



一応独立採算になっていて、社員のデリバリーについての手続き関係、給与計算など労務管理全般の事務仕事に追い回されていた。当時は給与計算も手作業でタイムカードを整理して、そこから台帳を作っていく。給与日には、金種を指定して銀行からお金を引き出す。給与明細に合わせて一人分ずつ封筒に入れる。一円でもお金が残ったら、全部やり直しになる。色々苦労はあったが、最初批判的であった社員と年月とともに融和し信頼関係の中で仕事を遂行できたことはいい思い出となっている。後に社労士になってからの仕事にもこの間の経験が大きく役立っている。業績も順調だった。

しかし、次期社長として入ってきた社長の息子さんの一存で本社の他の事業部に配置転換となった。約束が違おうと抗議したものの受け入れられず、3年と数か月で、社長代行から部長へと降格した。最後の日、工場長から皆を代表して挨拶があった。「社長は、社長さんは・・・と絶句した後、私達の事を思い、本社とのパイプ役になり、労働条件の改善や、福利厚生に全力で取り組んでくれました。毎日毎日、遅くまで事務所の灯がついていた事を忘れません。皆んなで社長を拍手でお送りしましょう。」社員からの拍手と、工場長との固い握手に思わず涙がこぼれた。多くの人の善意に送られて工場を後にした。



新しい職場は明石の大蔵谷。モップ、マットなどのダストコントロール商品のレンタル事業部。前職の部長が入社以来20年近く同じ事業部に専属していたこともあり、10数名の社員15社程のフランチャイズの各代理店も、私の就任に大反対し、元の部長に戻せという声が大きかった。不慣れな仕事の上に、そのような環境、前部長の尻ぬぐいもさせられ、悪戦苦闘の毎日。ちょうど新築した自宅の書斎に入る事もなく休みもなく、心と体はずたずたの状態であった。ただ早朝に姫路から神戸に向かう姫路バイパス、加古川バイパスで見られたパノ

ラマのように美しい朝日と陽光が心の支えであった。私は秘かにサンシャインロードと名付けていた。2~3年経過して代理店の社長から「今度の部長の方が、まじめで公正で親身になって話を聞いてくれる」との評価が出はじめ、社員達も前部長との違いを理解してくれるようになってきた。業績も順調に推移していたし、自分自身もようやく自信が付き始めていた。そんな時、突然に休養の話が出た。どうも今の事業部に適していないのではないかという、一方的な言い分、評価だった。この様ないきさつがあり退職に至った訳です。正確に言えば2回目の失業（1回目は千葉県船橋市の食品会社の倒産による失業）今は閉鎖された、広畑のハローワークへ失業給付を求めて通うことになった。

社労士への道は、どこか心の奥にあり続けていたが、退職ということで、それが鮮明な目標となった。受験という目的のお陰で、失業の痛手さえ大きな落ち込みとはならず受験準備は順調に進んだ。一週間に1回は大阪へ通学し、別の受験講座の通信教育も並行して受けた。若い先生、若い人たちに交じっての受講であったが、背水の陣であったことで気にはならなかった。とにかく合格しなければ後の人生はないといった状況から、受験勉強そのものが苦痛であったということは一度もなかった。田舎の年老いた両親や妻子や周りの人々の手前も、とにかく合格するしかないんだと言う強い思いがあった。それと元の会社への恨みつらみが大きなバネとなっていた。（以下次号）



令和2年9月

季節性インフルエンザワクチン 接種時期ご協力のお願い

! 今年 は 過去5年で最大量（最大約6300万人分）のワクチンを供給予定ですが、より必要とされている方に確実に届くように、ご協力をお願いします。

10月1日～

接種希望の方はお早めに
65歳以上の方（定期接種対象者） ※

※65歳以上の方のほか、60歳から65歳未満の慢性高度心・腎・呼吸器機能不全者等
※定期接種の開始日は、お住まいの市町村で異なりますのでご確認ください。

上記以外の方は
10月26日まで接種をお待ちください
65歳以上の方の接種ができるよう
ご協力をお願いいたします

10月26日～

接種希望の方はお早めに

**医療従事者
基礎疾患を有する方
妊婦
生後6ヶ月～小学校2年生**

上記以外の方も接種できます

皆様へのお願い

- ・ 感染防止の3つの基本である ①身体的距離の確保、②マスクの着用、③手洗いの徹底もお願いします。
- ・ 接種に当たっては、あらかじめ医療機関にお電話での予約をお願いします。
- ・ インフルエンザワクチンは重症化予防などの効果がある一方で、発病を必ず防ぐわけではなく、接種時の体調などによって副反応が生じる場合があります。医師と相談の上、接種いただくとともに、接種後に体調に異変が生じた場合は医療機関にご相談いただくようお願いいたします。
- ・ お示した日程はあくまで目安であり、前後があっても接種を妨げるものではありません。